情熱介護　第五弾　紅山荘

“ありがとう”が導いた、介護の道

とび職から介護職へ　～支える喜びを見つけた人生の転機～



これまでどのような仕事をされていましたか？

職員A（インタビュアー）



建設業のとび職として瀬戸大橋の工事に携わっていました。高所での作業が中心で、一つの判断ミスが重大な事故につながるため、常に緊張感と責任感を持って仕事をしていました。

O様（インタビュイー）



なぜ介護の道に進もうと思ったのですか？



結婚して子供ができたタイミングで、家族から
「高所作業は危ない。最悪の場合、命を落とすかもしれない、、
今一度お仕事を考え直してみては?」と助言を受け、転職を考えるようになりました。
そのタイミングで知人の紹介で「介護施設で用務員の仕事はどうか?」と勧められ、送迎や草むしりなら自分でもできると考え、応募したのが介護職に進んだきっかけです。



実際、介護施設の用務員をしてみてどうでしたか?



面接時、施設長から「なんでもしないかんよ」と言われ、生活もかかっているので、とりあえずやってみようという気持ちで承諾しました。
用務員以外にも色々な行事、イベントの設営、絶対に無理だと思っていた排泄介助の仕事もあったりと、最初は苦戦しました。
ただ、子育てで子供のおむつ替えをしていたり、食事介助や身体介助で利用者と関わる中で頂ける‘ありがとう“の言葉に励まされながら、少しずつ気にならなくなり、できるようになりました。自分でもびっくりしています。僕でできたので未経験の人でもできると思っています。



介護職に就いてみて、どんな印象を受けましたか?

身体をくねらせながら横になっている方、寝たきりの方、
歩くことさえままならない方など、さまざまな利用者の方がいる空間を
初めて目にしたとき、「こんな世界もあるのか」と大きな衝撃を受けました。
そのときの驚きと戸惑いは、今でも鮮明に覚えています。





初めて現場を見たときは大きな衝撃を受けたとのことですが、
現在に至るまで続けてこられた秘訣はありますか?

この仕事は本当にやりがいのある仕事だと感じています。
利用者さんから「ありがとう」と感謝の言葉をいただく機会が多く、
自分の支援が誰かの役に立っていることを日々実感できます。
また、一人ひとりの利用者さんと関わる中で、
その方の生活や笑顔を支えることができたと感じられる瞬間は、
大きな喜びにつながっています。





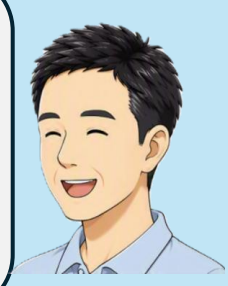
利用者さんの『ありがとう』や、誰かの役に立っている
実感がやりがいとのことですが、特に印象に残っている
エピソードはありますか?

訪問入浴で利用者様のご自宅を訪問した際、介護が十分に行き届いておらず命に関わるほど深刻な状態の方がおられました。ご家族もどのように対応すればよいか分からず、大変困っている状況でした。そこで私は、ご本人の体調管理や生活環境の改善に取り組むとともに、ご家族とこまめに情報を共有しながら、一緒に課題解決を進めました。その結果、利用者様の状態は徐々に改善し、安心して生活を送れるようになりました。自分の関わりによって、一人の命や生活を支えることができたという達成感は、それまで味わったことのないものでした。この経験は今でも強く印象に残っています。
介護の仕事は決して楽なことばかりではありませんが、利用者様やご家族から心からの「ありがとう」をいただいた時には、「この仕事を選んで良かった」と実感します。



～O様から皆様へメッセージ～

今はどんなに若くて元気な方でも、年齢を重ねれば誰かの支えが必要になる時が訪れます。
介護の仕事は、その人が歩んできた人生というノートの「最後のページ」に寄り添い、その人らしい毎日を支えることができる、とてもやりがいのある仕事です。
一人ひとりの人生に深く関わり、笑顔や感謝に触れられる介護の道へ、
あなたも一歩踏み出してみませんか？



ご協力ありがとうございました。　インタビュー協力　　協力企業　　紅山荘様